HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	メキシコ出張報告記
Author(s)	大平, 具彦
Citation	国際広報メディアジャーナル, 1, 199-206
Issue Date	2003
Doc URL	http://hdl.handle.net/2115/445; http://www.hokudai.ac.jp/lang/imc/imc-j/imc-j-1/imcjournal.html; http://www.hokudai.ac.jp/lang/imc/imc-j/imc-j-1/ohira.pdf
Rights(URL)	http://creativecommons.org/licenses/by-nc-sa/2.1/jp/
Type	article (author version)
Additional Information	There are other files related to this item in HUSCAP. Check the above URL.
File Information	imcj_1.pdf

Instructions for use

Hokkaido University Collection of Scholarly and Academic Papers : HUSCAP

研究動向

メキシコ出張報告記

国際地域文化論講座　大平　具彦

様々な肌色の顔をしてひしめく人々、排ガスを撒き散らして走り抜ける車の群れ、どこまでも広がる街々、そして街を取り巻く山々の中腹に向かってさえも野放図に密集してゆく家々――高度 2200mの地に横たわる人口 2000 万余の巨大都市メキシコ･シティー。500 年前、スペインに征服される以前はここが広大な湖であったとはまるで信じられない。

カトリック・スペインは、かつてのメキシコ、異教なるアステカ帝国を徹底的に破壊した。日本で例えれば、あの元寇で、「神風」が吹かず、フビライの軍が日本を征服し、元が徹底的に日本を破壊して、かの地の言語・文化・習俗がこのユーラシア東端の島国を一挙に覆っていったことに匹敵しようか。であったとすれば今ごろのわれわれはどういう風貌をし、どんな言葉を話していたろうか。刺身などよりも肉食を主とし、気性も大分変わっていたのではなかろうか。つまり、16 世紀以降メキシコ（要するにラテンアメリカ全体）で繰り広げられたこととは、そうした凄まじいドラマだった。そうした中でヨーロッパ・スペイン人とアジア系先住民は人種的にも文化的にも深部から混血し、文明の交差点たる今日のメキシコが形成されていった。そして 20 世紀、ロシア革命の指導者トロツキーとシュルレアリスムの盟主ブルトンの来訪を契機に、混血の地メキシコはその出自にふさわしく、Trans-Culture の現代的舞台の前面に躍り出る。フリーダ・カーロとディエゴ・リベラの画家カップルの活躍も、そしてオクタビオ・パスの詩と思想が豊潤に開花してゆくのも（1990 年ノーベル文学賞)、そうした文化的文脈の中でこそ理解されるべきだろう。

20 世紀文化、とりわけ芸術や文学の領域でモダニズムとかアヴァンギャルドとか呼ばれてきた運動は、メキシコにその一端を見るように、実は、ヨーロッパ文化と、ヨーロッパが植民地化した地域の文化との異種交配（混血）を源流としている。現在「クレオール」（Creole）とか「文化横断」（Trans-Culture）とかいう名で言い表わされる大きな流れは、その運動の中で生まれていった幾つもの文化混血の支流が豊かに流れ込んで、ひとつの大河へと生成してきたものである。しばらく前から、シュルレアリスムのそうした「文化横断（Trans-Culture)」的な側面に関心が深まっていったので、科研費による研究（「20 世紀多元文化形成とシュルレアリスム――オセアニア、メキシコ、カリブ海を中心に」）の一環として、この夏に（2002 年 7 月 26 日～8 月 9 日）メキシコを訪れたというわけである。今回は、メキシコ史やメキシコ現代芸術の現地での調査のほか、メキシコにおける多元文化形成をテーマに、とりわけオクタビオ・パスとシュルレアリスムの関係を軸にして、関連の作家、批評家、研究者およびオクタビオ・パス夫人にインタビュー（フランス語による）を行なった。インタビューに応じてくれた方は次の通りである。

・アドルフォ・カスタニョン氏
1952 年生。批評家、詩人、翻訳家。メキシコの一大出版組織である Fondo de Cultura Economica の編集主幹。著書に『独断的メキシコ文学通覧』、『オクタビオ・パスの死』ほか多数。
・クリストファー・ドミンゲス氏
1962 年生。批評家。著書に『文学生活の屈従と偉大』ほか多数。
・アルベルト・ルイ＝サンチェス氏
1951 年生。作家、批評家。雑誌『メキシコの芸術』を主宰。現代メキシコで最も注目される作家の一人で作品は仏訳もされている。『ユリイカ』の 2002 年 7 月号に安藤哲行氏による紹介記事がある。著書『モガドールの秘密の庭』ほか多数。オクタビオ・パスの主宰していた雑誌『ブエルタ』の編集長を務めていたこともある。
・ロウルデス・アンドラーデ氏
シュルレアリスム研究者。ブルトン亡き後のシュルレアリスム活動の中心にいたジャン・シュステルと同伴。著書に『植物建築』ほか。
・マリー＝ジョゼ・パス氏（オクタビオ・パス夫人）
フランス生まれで画家。1964 年にオクタビオ・パスと結婚の後、仕事も含めて彼の最愛、最良の伴侶。彼の死後「オクタビオ・パス財団」を主宰。絵画作品のほか、オクタビオ・パスと共著の詩画集『象形と形象』など。

現代多元文化形成におけるシュルレアリスムとメキシコの関連については、別の機会に論をまとめることとして、以上五氏との会見でのポイントを以下にピックアップしておきたい。なお、各パラグラフ末尾の（　　）内の人名は発言者名、各[　　] 内は筆者の注記、コメントである。

・メキシコには、メキシコ人の先祖は日本人であるという「迷信」があるが（笑）、メキシコ文化の基底にはアジアがあることは、メキシコを認識する上で重要である。（カスタニョン）
[コロンブス以前のメキシコ（アメリカ大陸）先住民は、数万年ほど前に、ベーリング海峡が氷結して地続きだった時にアジアから移住してきたモンゴロイドである。数万年前と言えば、数百万年の長い人類史で見れば 100 分に 1 に過ぎず、つい昨日とは言わないまでもいわば「近過去」に属する。文化は人種と固定的な連関にあるものではないが、表層は西欧化されているとはいえメキシコ的思考の深部にアジア的（東洋的）要素が脈づいているのは確かである。例えばシュルレアリストのアルトーを牽引したタラウマラ族の魔術的儀礼、カスタネダの作品に登場する呪術師ドン・ファンの「ナワール的」世界（近代理性を超越した世界）などは、そうした文脈に位置づけられよう。]

・メキシコは、その文化混血が今もって滔々と進行中であることから考えれば、ひとつの「国」というよりも――カスタニョン氏によれば、「国」[仏語 pays 西語 país]とは、「風景」[仏語 paysage 西語 paisaje] と「契約」[仏語 pacte 西語 pacto]　との結合

であるとのこと――未来へと向かうある開いた「プロジェクト」と捉えるべきであろう[「プロジェクト」にあたる仏語 projet は「前に投げること pro-jeter」、さらには実存哲学で言う「投企」の意がある]。その点、求心的でありその分「閉じて」いるヨーロッパとは根本的に異なる。パスは、そうした「メキシコ性」の体現者であると言える。（カスタニョン）
[パスは、ヨーロッパ・北米文化は言うまでもなく、アステカ文化、そして外交官を務めていた関係もあって、インド文化や日本文化（林屋永吉氏と『奥の細道』を西訳している）など東洋文明にも大変に造詣が深い。パスの詩と評論においては、それら諸文明が混淆し統合されて新たな次元に向かう方向性が、コスミックにかつ鋭利に表現されている。雑誌『iichiko』2002 年秋号の中で、メキシコ現代詩人のガブリエル・サイードが、「どの言語でもいいが、『泥の子供たち』[近代詩をヨーロッパ近代に対する批判的視点から論じたパスの代表的評論]を書ける西欧人が何処にいるか。[その評論は]様々な言語における詩の運動を考慮するのみならず、対照となる背景として非西欧的なものを打ち建てることで、浪漫主義から西欧詩全体の批判的展望を開こうとするものである。誰が文化、社会、政治など全ての意味で近代性に関する分析を[これほどまでに]系統立てることが出来るか」と述べているのは、その意味で秀逸な指摘である。]

・ラテンアメリカ全体に言えることだが、特にメキシコにおいては、詩、批評、文化、政治が、ひとまとまりのものとして統合的に捉えられ追究される。パスの少し上の世代で後のメキシコおよびラテンアメリカ文学に多大な影響を与えたアルフォンソ・レイエスはパスのモデルとなった人であり、彼も詩人であり、批評家であり、外交官であった。またパスが著作でも論じているフアナ＝イネス・ド・ラ・クルス[17 世紀メキシコの修道女にして詩人、劇作家]はそうした知識人の原型と言える。（カスタニョン）

・パスとシュルレアリスムの関係については、ブルトンやペレとの出会いがパスに決定的な影響を与えたというよりも、それ以前にアメリカ合衆国に留学し、英米 20 世紀詩を通して詩への視野を広めていたパスが、その詩的道程の中で新たにシュルレアリスムの方法を摂取していったという方が実相に近い。（カスタニョン）

・アステカを征服したのは確かにスペインではあるが、それは軍隊としてであって、当時（1521 年）のスペイン王は、神聖ローマ帝国皇帝を兼ねヨーロッパにその権勢を振るうハプスブルグ家のカール５世であり、スペインのアステカ征服と植民地化とは、より大きな尺度で言えば、汎ヨーロッパ的な勢力が新大陸に支配を確立してゆくプロセスであった。その分、メキシコのその後の歴史と文化形成においてはもちろんスペインが中核的影響をもたらしたにせよ、一方では渾然とした汎ヨーロッパ的な環境が当初からあった。（ドミンゲス）

・ヨーロッパ・カトリックは先住民の信仰と習合してグアダルーペ寺院の「褐色の聖母」

[ここの聖母は黒い髪と褐色の肌を持ち、聖母の中で特異な存在である]を生んだ。だがそれは、キリスト教信仰というより「聖母信仰」であり、その原型はアステカの宗教の女神トナンツィン[ナワトル語で「神々の母」の意]に見られる。つまり「褐色の聖母」はトナンツィンのカトリック化であって、これもまたメキシコ的混淆の一例である。（ドミンゲス）
[滞在中の 7 月 31 日に、ローマ法王ヨハネス・パウロ 2 世がメキシコを訪問し、1531 年にこの「褐色の聖母」の出現に立ち会った一人の先住民フアン・ディエゴの列聖の儀式がグアダルーペ寺院で（先住民も色鮮やかな独特の衣装で加わって）盛大に行なわれた。ローマ法王とインディオとの「共存的融合」は何やら奇妙な風景ではあるが、これもメキシコの現実であるようだ。]

・シュルレアリスムは、30 年代のメキシコが世界の様々な先端的潮流と出会う点では（特にレオノーラ・カリントンやレメディオス・バーロなどの絵画の面において）大きな意味を持ったが、一方、シュルレアリスムとりわけブルトンにひそむ秘教主義、エリート主義、ドグマチックな見方、そしてまた、フランスにはないメキシコの自然的文化的独特さをすぐさまシュルレアリスム的に解釈する文化的優越の視線などに対しては、批判する向きも多い。（ドミンゲス）

・メキシコにおいては、理性、悟性以前のものが人の心を動かす。それは感覚的に、バロック的に、祭儀的に表出する。メキシコでは感覚や情動は、先ず眼によって、そして耳によって表現される。したがって、メキシコでは絵画、そして音楽によって先ず表現され、その後に言語化され、精神的な形が与えられる。一方フランスでは、先ず言語があり、感覚と情動は言語によって表現され、統御され、そのプロセスの中で精神は理性によって統合されてゆく。（ルイ＝サンチェス）

・シュルレアリスムとメキシコの関係についても、シュルレアリスムが理性の向こう側を開拓しようとした運動であった点で、メキシコとの出会いは起こるべくして起きたと言える。だがその探求において、シュルレアリスムに内在するフランス的な言語・理性がやはり優位を持っていた点で、シュルレアリスムとメキシコはクロスオーバーしつつすれ違いも見せた。パスは、シュルレアリスムのメキシコ体験を、メキシコのシュルレアリスム体験を取り入れつつ、独自の世界を作り上げていった。（ルイ＝サンチェス）

・メキシコでは人は「コミュニオン」へと向かう。それは、隣接する北の巨人のアングロアメリカを支配している実利主義とは全く別ものである。（ルイ＝サンチェス）

・パスは日本と日本文化を愛していた。俳句の簡潔な表現と精神性、宇宙性には特に関心が深かったが、これはタブラーダの影響も強く受けている。（パス夫人）
[タブラーダは、日本の俳句をメキシコに紹介した 20 世紀前半の詩人。俳句にインスピレーションを受けた彼の詩について、パスは「タブラーダにとって、ひとつひとつ

のイマージュはそれ自体が詩であり、一篇一篇の詩は、思いもかけぬ関係から新たに生まれるひとつの世界、だが同時に、深く、透明な世界であった」と述べている。]

・パスにとってシュルレアリスム、ブルトンとの出会いは、その後の彼の詩と思考にとって本質的かつ決定的なものであった。シュルレアリスムはパスの詩に独自のイマージュ力をもたらし、またシュルレアリスムの思想は彼の詩の地平を大きく広げた。（パス夫人）
[ドミンゲスなどによると、パスとブルトンとは 18 歳の年の開きがあり、両者が出会った時の双方の社会的位置から見ると、まるで大家と新弟子の関係のようなものだったということだが、パス夫人の方は、パスとブルトンの結びつきを、もっと根元的なものとして捉えている。結婚して以来片時も離れたことなかったといわれるパス夫人の方が、やはりパスの脳の襞をよく感知していると見るべきか。]

・（筆者の次のようなコメントに対して）
[確かにパスはシュルレアリスムから多くのものを得ており、双方の詩的イマージュは、いずれもいわゆる「相隔たったものの結合」から生まれているが、一方のシュルレアリスムのイマージュがいわば光の断片となって砕け散ってゆくのに対して、パスにあっては、イマージュの光は、何か「他のもの」へと向かう新たな意味創成の如きものを呼吸している。パスはシュルレアリスムから養分をたっぷりと得つつ、それを別次元のより大きな融合の力へと高めるべく、シュルレアリスムを経ながらさらに遠い地点まで進んで行ったように思われる。]
シュルレアリスムのイマージュとの対比も含め、まさにその通りと思う。メキシコ人として生きた彼は、メキシコがそうであるように、彼自身が諸文明の交差点だった。それも詩、文学、芸術、歴史、思想、文化、政治等々すべてを含めて。彼の詩が「何か」へと向かおうとしているのは、それが彼のそうした生の表現そのものであったからだ。

以上、メキシコ、シュルレアリスムを通して現代の多元文化を考えるにあたって、多くの有益な示唆を得ることができた。シュルレアリスムとは、いわば人間の意識内における未知の大陸（「テラ・インコグニタ」）を探求し開拓しようとする 20 世紀最大の詩・芸術・思想の運動であったのだが、それが地理上の、文明上の「テラ・インコグニタ」であったアメリカ新大陸と結びついていったことは、意識内の他者（無意識）とヨーロッパにとっての文化的他者とがある種の内的連関にあったことの表われであると見ることもできようし、「近・現代文化と他者」、そして今後の文化のキー・コンセプトである「文化横断」を考えてゆく上で極めて興味深い。

メキシコ滞在中しきりと思ったのは、日本において文化的多元なり文化横断なりを考えるとはどういうことかということだった。状況的にはそうした環境ができつつはあるが、文化混血や多元化に進むエネルギーに乏しく、むしろ「顔がない」と言われる私たち――。日本はもちろんラテンアメリカではない。だが政治的に経済的に、あるいは軍事的に外交

的に、そして文化的に社会的に、今やアングロアメリカの一部になりつつあることを思えば、そのアングロアメリカを介して、また違った風景が見えてきそうである。

ラテンアメリカは、かつて外から暴力的にヨーロッパとの混淆が進み、今は北のアングロアメリカの勢力下にあるが、近代日本は、戦前は内発的にヨーロッパを取り入れ、戦後は従属によってアメリカ化した。この視軸で見るならば、日本もラテンアメリカも、ヨーロッパとそれを受け継いだアングロアメリカの覇権的パワーのもとで作られてきたという共通の経緯がある。日本では欧米とのハイブリッド化は進んだが、ラテンアメリカのような深部からの混血には至らなかったという違いも、その大きなプロセス内での濃度差と言えるだろう。日本は確かに地理的にはラテンアメリカではないが、歴史的経緯から言えば、日本とラテンアメリカとは、実は、欧米を父とし、モンゴロイドを母とした腹違いの子同士かもしれないのである。

日本ではアメリカと言えば――アングロアメリカ化によってその分視野を狭くさせられているせいか――自動的にＵＳＡだけのことになるが、かように「アメリカ」とは、アジアでもヨーロッパでないが、実はアジアを母とし、ヨーロッパを父とし、プロテスタント系のアングロアメリカとカトリック系のラテンアメリカが兄弟として生まれ、そして今度はアングロアメリカが父となってアジアの東端に戦後日本を生みつつ大陸中国にも進出を窺おうとしている、近現代における文明混淆的な新たな文明の軸なのだ。この意味でも1492 年のコロンブスの「アメリカ発見」が持った意義は途方も無く大きいと言わねばなるまい。アメリカのみならず日本もまたコロンブスの子供（彼の航海を生んだ背景に「黄金の国ジパング」があったことを想起しよう）なのであって、われわれの「顔のなさ」もこうした文脈でこそ克服されてゆかねばならないのではなかろうか。

それにしてもメキシコは、原色的な色彩に贅沢なほどに包まれて明るい（だがラテン系文化全般に言えることだが、ただ底抜けに明るいのではなく、そこにはある暗さが溶け込んでいる）。今福龍太氏は、著書『荒野のロマネスク』（岩波現代文庫）の中で、メキシコの文化的ヴィジョンを示す最も適確な言葉として、「華麗さ」（同氏がこの「華麗さ」を「火炎樹」の木々と結びつけているように、フランス語「フランボワイヤンス」の形容詞形「フランボワイヤン」は、「燃え上がる」の意）を挙げているが、まさにむべなるかなという感じがする。滞在中にメキシコの生んだ現代建築家ルイス・バラガンの自邸を訪れたが、彼の建築に見られる強烈な色彩も、その「フランボワイヤンス」と深く通じ合っている。どこかミステリアスな暗さを秘めて「燃え立つ」そうした「メキシコ色」、それは（カスタニョン氏の言う）メキシコという「プロジェクト」が、単に悟性的なレベルで語られるだけのいわゆる「多文化共生」などでなく、もっと官能的で根源的な体験にほかならぬことを強くアピールしているように思われる。

最後になるが、今回のメキシコ研究出張にあたっては、摂南大学の安藤哲行氏（ラテンアメリカ文学、アレナス『夜になるまえに』など訳書多数）、同大学講師オラシオ・ゴメス・ダンテス氏（スペイン語、ラテンアメリカ文化論）、そしてメキシコ大使館文化担当官アウレリオ・アシアイン氏（詩人、批評家、パスの主宰する雑誌『ブエルタ』誌の編集に携わる。現在『パレンテシス』誌主宰。著書『風の共和国』、『活字体』など）に大変にお世話

になった。今回の訪問で、インタビューをはじめこれほどまで実りある成果をあげられたのも、三氏の存在のおかげである。この誌面を借りて、心よりお礼を申し上げたい。